A R P A K ・ N E W S L E T T E R

アルパック ニュースレター

VOL147　2008年1月1日　ISSN 0918-1954

迎　春

40周年記念事業「アルパック・タグボート・フォーラム」を開催しました
（本文中に関連記事があります）

目次／contents

新年のあいさつ…… 2

人・まち・地域…… 5

・40周年記念事業「アルパック・タグボート・フォーラム」を開催しました

・心地よく歩ける京都・四条を目指して／高野隆嗣

きんきょう…… 12

・地域ぐるみの子育て、そのホントノトコロへのアプローチ／廣部出

・京都の繁華街を芸術・文化で盛り上げる。木屋町の挑戦！！ まなびや2007～芸祭～の開催／山﨑裕行

・大都市と連携して地域の再生を図る事業モデルの確立に向けて～事例紹介 京都美山編～／大久保悠子

メディア・ウォッチ…… 15

・「2015年 アジアの未来」／森脇宏

まちかど…… 16

・今、小金井が面白い（その2）～商店街と地域住民とのふれあい＆交流イベント～　／黒崎晋司

新年のあいさつ

新年あけまして
おめでとうございます

全所員の輝く活動で地域再生に貢献します

代表取締役会長　金井　萬造

旧年中は、アルパックの40周年の記念事業と役員世代の若がえり等で、大変お世話になり、ありがとうございました。昨年の前半は社長として新しい体制づくりと自分の新しい役割、会長としての原点に立ったあり方を考え、後半は新アルパック体制が順調に展開されていくために注力する一年でした。

さて近年、地域の再生にはより多くの人の知恵と努力が大切になってきていると痛感しております。業務ではまさに、地域が元気になり地域の資源や人々の情熱が発揮されて、地域経済の活性化に結びつけていく方法を学び実践する一年でした。

各地の成功事例を研究するなかで、地域を活性化させたいという情熱を持った人材を発見する「人材力」の眼力を持ち、地域を運営・経営していく組織づくり、資源に付加価値をつけて、地域の人々が自分の地域を誇りとして確認し、発信していく過程で自信や確信になり、財貨をかせぐ地域商品と市場開拓に結びつけるシステムをつくり上げていくことの大切さ、重要さを学びました。研究分野では、産業振興、観光振興の検討の機会に恵まれました。多くの方々、大学の先生方、地域の行政、経済人、住民やNPO、ボランティア団体との出会いがあり、多くの知識を吸収しました。

アルパックは、地域の再生に向け地域の構成員が連携してその持てるものを発揮する、「地域の『内発的連携』の再構築」に努力したいと思います。地域でより大きな成果をあげるため、全所員が眼を輝かせて厳しい状況の中でも楽しく、協働の力を発揮できる状況づくりに努力してまいります。

新年にあたり皆々様のより一層のご活躍を祈りますとともに、アルパックへのご指導の程お願い申しあげます。

個を活かす創造企業・アルパックをめざして

代表取締役社長　杉原　五郎

梅田望夫さん（IT分野の知的リーダー、シリコンバレー在住）が「ウェブ進化論」に続いて著した「ウェブ時代をゆく～いかに働き、いかに学ぶか」（ちくま新書）を読みました。オプティミズム（楽天主義）を基本に、日々進化しつつあるウェブ世界をリアルに生き生きと語っています。「新しい事象を積極的に未来志向でとらえ、挑戦する若い世代を励ましつつアドバイスを与えることのできる〈知的で明るい大人〉が増えなければ、未来の創造はできない。」

ハーバード・ビジネススクールのクリストファー・A・バートレット教授らがまとめた「個を活かす企業」（ダイヤモンド社）は、これからの企業変革の方向を考える上で示唆に富んでいます。世界の20社を越える数百人のマネージャーへのインタビューをもとに、情報化と知識に基づく競争の時代における、企業戦略と企業マネージメントのあり方を深く分析・洞察しています。個を活かす自律的企業組織の創造が重要との結論です。

アルパックは、本年、創業41年目を迎えます。昨年末の40周年記念事業「アルパック・タグボート・フォーラム」では、まちづくりの最新情報を発信・交流するとともに、ご出席いただいた方々に新たな出会いと感動を提供することに努めました。この成果を受け継いで、個を活かす創造企業としてアルパックをさらに発展・進化させていきたいと考えています。引き続き、ご指導・ご支援をお願いします。

本年もどうぞよろしくお願いいたします

ネットワーク蓄積

取締役相談役　三輪　泰司

アルパックは、40周年を経ました。ひとえに、皆様のおかげです。心より感謝申し上げます。

40年やってきますと、良いことも、良くないことも見えてきました。

アルパックは、創業期から間口がむちゃくちゃ広くて、どれもこれも奥行きがなく、深めるために懸命に勉強しなければなりませんでした。今は、それぞれ蓄積が出来、仕事に掛かるリード・オフが早くなり、リード・タイムも短くなって、この節の超低委託費の中で、なんとかご期待に応えながら凌いでいます。さらに、組織はもっと蓄積を整備し、個人はもっと勉強し、知的再生産に力を注げるようにしないと、と思います。

あらゆる所で、モラル・ハザードとともに、能力の低下・枯渇・疲弊が、怖ろしい勢いで進んでいます。原因はルールなき競争です。

昨年から京都市の「新景観政策」が注目されています。街を歩いてデザイン・サーベイをして判ったこと。地域住民との対話が足りないこと。“建築士”がデザインを勉強していないこと。対話や勉強をする余裕がないのです。

好循環に返るのは、庶民の行動原理に従うこと。蓄積として整備し、勉強せざるをえないように追い込んで行くことです。多少面倒ですが、お金だけでなく、「総合評価方式」のような評価・選定のルールでしょう。

それで景観政策は完成するでしょう。

言えば言っただけ、跳ね返ってくるのも世のならわし。建築士たち、アルパックとその社員そして自分自身も学習しないといけません。

40年のネットワークの蓄積は、たいへんなものです。活かせるように整える仕事も“出来高”になりませんので、たいへんな作業です。

誰かがでなく、先ず“己から”。

年頭にあたっての決意です。

京都からおもしろく

京都事務所長　松本　明

昨年7月、京都事務所の事務所長を拝命いたしました。京都はいま、全国にユニークな情報を発信しています。高さ・眺望・デザインなど総合的な「新景観政策」のスタート、目抜き通りの四条通でのトランジットモールを展望した交通社会実験、観光客5000万人構想の着実な推進、市内各所での町衆主導の個性あるまちづくり、学校跡地等を活用したユニークな施設づくりなどなど。「古都」の財産を守り受け継ぎながらも、ありきたりではあきたらない京都の人々の心意気が、こうしたチャレンジを後押ししているのではないかと思います。

京都と地域を引っ張るタグ・ボートの一隻として、今後とも所員一同、元気一杯でまちづくり・建築づくりに取り組んでまいります。宜しくお願い申し上げます。

関西から再生の風を吹かせましょう

大阪事務所長　森脇　宏

大阪事務所は、昨年、設立35周年を迎えました。36人の所員を擁し、6つの計画部ごとに得意分野を充実させ、地域振興、行財政、都市計画、市街地整備、産業、観光、社会福祉、交通、住宅、廃棄物、自然管理、景観、まちなみ、ユニバーサルデザイン等、様々な分野で各地のお手伝いをしています。

昨年の関西は、好調な家電のニュースもありましたが、個人消費の低迷は続き、老舗料亭の偽装など、残念な話題の提供も多かったように思います。

こうした閉塞感の打開をめざし、関西から都市再生、地域再生の風を吹かせるため、大阪事務所の多様な分野の総合力や多彩なネットワークを活かして、楽しみながら貢献していきたいと思っています。

本年も引き続き、ご指導、ご支援、ご協力くださいますよう、お願いいたします。

新年のあいさつ

新年あけましておめでとうございます

今年も地域の再生と創造にチャレンジします

名古屋事務所長　尾関　利勝

新年のお祝いとともに、旧年中のご厚情に感謝申しあげます。おかげさまで名古屋事務所も開設以来、四半世紀を迎えます。名古屋圏は好調な製造業に支えられて「元気名古屋」と言われる反面、サービス業や自治体財政はまだ厳しい局面にあります。

また、都市開発では名古屋駅前の超高層ラッシュの他、都心のファンドによるビル建設は少しかげりを見せています。合併に期待した中山間地域もこれからが正念場です。

経済もまちづくりも二極化が進む中、短期経済政策だけではない長期的視座に立つ地域再生が求められていると実感します。厳しい環境にある事務所経営とともに、地域の再生と創造に今年もチャレンジして参ります。引き続き皆様方の暖かいご支援をお願い申しあげます。

新年のご挨拶

東京事務所長 兼 取締役計画部長　堀口　浩司

昨年の秋より、東京事務所では新宿、多摩、神奈川と３つの分室において、それぞれ地域とテーマを分担して活動しております。新宿では桃薗、多摩は小林・黒崎、神奈川は野口がそれぞれの得意な領域を活かし、そのときどきに連携しつつ活動しております。

私（堀口）は仕事のフィールドが大阪と兵庫地域であるため、ほとんどの時間は大阪事務所におりますが、月に何度か東京と大阪を移動しながら、それぞれの地域の情報交換や仕事の連携の橋渡しをすることが役割のひとつとなっています。

東京のエネルギーと関西の深い味わいがブレンドされると、いい地域づくりができるのになぁと考えています。今年もよろしくお願いします。

今年も新しい仕事にチャレンジ

九州事務所長・（株）よかネット代表取締役

山田　龍雄

最近、銀行の方に話を聞くと、昨年に比べて設備投資などで借入する業者は増えているそうで、少し福岡も景気が上向いてきているのではないかと思います。また、トヨタ、ダイハツ、日産など自動車産業の進出及び生産拡大にともなって関連企業にも波及し、これまで塩漬けされていた工場用地が売れているとの話を聞きます。この景気好調の波は、コンサルタント業界には、まだ届いていないようです。

昨年度は、弊社として「景観マスタープランづくり」、「古い団地再生に伴う地元協議会運営のサポート業務」、「都市住民をターゲットした農学校づくり」など、新しい仕事にチャレンジさせていただきました。今年も、所員一同新たな仕事、遊びに頑張っていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

40周年記念事業「アルパック・タグボート・フォーラム」を開催しました

アルパック・タグボート・フォーラムへのご参加、ありがとうございました

昨年末に開催しました40周年記念事業「アルパック・タグボート・フォーラム」に、多数のご参加をいただき、ありがとうございました。フォーラムには、基調講演者・報告者を含めて約190名、夕方からの交流懇親会には約100名の参加をいただきました。

当日会場で、後日電話やメールなどで、心暖まる感想をたくさんいただきました。

- アルパックらしい取り組みで、しっかり楽しませていただいた
- 多彩な基調講演者と報告者によるお話は、新鮮で面白かった
- フォーラムに参加されたいろいろな方と出会い、知り合いになれて有意義でした
- Like a Tugboat（地域の曳き舟として）は、わかりやすいコピーだった

このたびのフォーラムは、15名の所員による実行委員会を組織して、8月初旬から12月まで9回の会議を重ねて企画・準備を進めてきました。テーマ別まちづくり交流会のために、まちづくり展示として、30数テーマ、40枚近いパネルを作成しました。

まちづくりの最新情報と出会いの場を提供して、参加者それぞれが気軽に交流していただけるように努めましたが、フォーラムの運営上、いろいろと行き届かない面もあったのではと反省しています。

今回のフォーラムの成果を生かして、社会の発展と地域の課題解決のために、引き続き努力していきたいと考えています。今後とも、皆様のご支援とご指導をよろしくお願い申し上げます。

（代表取締役社長　杉原五郎）

第1部：まちづくり講演会

創造都市の時代　佐々木雅幸さん（大阪市立大学都市研究プラザ所長）

トップバッターの佐々木雅幸さんには、「創造都市の時代～文化と創造性による都市再生～」をテーマに講演していただきました。

「創造都市」の概念は、21世紀初頭から世界的に広がりつつあり、バルセロナやボローニャ等がそのひとつのモデルとなっています。また9.11事件を転機に、文明の衝突やテロによる憎しみの連鎖を乗り越えるために、「アートでお互いに心を開いて対話しよう」ということが世界共通のテーマになりました。現在、「世界都市」から「創造都市」が世界の潮流となり、「創造階級」「創造産業」が注目を集めています。

こうした世界的な流れの中で、日本では、金沢で、現代アートの拠点としての金沢21世紀現代美術館の建設、横浜で、文化芸術創造都市事業本部の設置とバンクアートの活動など、各地で創造都市の取り組みが進展しています。関西では、京都で、西陣町家倶楽部の活動や新しい都市景観政策の採用、大阪で、大阪都市創造市民会議（クリエイティブ・大阪）の発足など具体的な動きがでてきています。

「創造都市のグローバルネットワークが形成されつつあり、それぞれの地域が発展していけるような取り組みを進めていきたい」と、佐々木さんは熱く語られました。

劇場から始まるまちづくり　中江裕司さん（映画監督、沖縄在住）

続いて、沖縄で映画づくりを行っている中江裕司さんから、「劇場から始まるまちづくり」をテーマに講演していただきました。

京都の下鴨に生まれ育った中江さんは、琉球大学に入学後、約27年間沖縄生活をされています。1972年に沖縄は日本に復帰しましたが、「沖縄の人々の中にある、本土の日本人に対する感情には複雑なものがある」と、中江さんは自らの体験を語ります。

沖縄で18万人を動員して大ヒットした「ナビィの恋」を一部上映し、その映画の登場人物・登川誠仁さんという国宝級の三味線奏者について紹介され

ました。次に、「ホテル・ハイビスカス」を一部上映し、基地のまち・辺野古での子どもたちを紹介して、「ひとがいないとまちは成り立たない、風景としても成立しない」と、中江さんは語りました。

那覇にある「桜坂劇場」を再生し、映画の上映だけでなく、ライブなどいろいろな取り組みを行って集客に努力していることを具体的に紹介されました。この桜坂劇場の再生が、実は、都心に多くの人々を集め、地域が活性化して、結果としてまちづくりに繋がっていると、中江さんは淡々と、しかし実感を込めてお話されました。

リーナルプロジェクトによる新たなマーケットの創造
藤原明さん（りそな銀行マネージャー）

3番目の講演者・藤原明さんには、企業と関係者とのコラボレーション（協働）による新たなマーケットの創造をテーマに、様々な取り組みを紹介していただきました。

「リーナル」とは、りそな銀行の「RESONA」と地域をあらわす「REGIONAL」を組み合わせた造語です。4年ほど前、公的資金の注入を受けた際に、「新しい銀行像を創ろう」との銀行トップのメッセージに応えて、藤原さん等を中心に新しい取り組みをスタートさせました。「あらゆる業種の企業とのつきあいのある銀行の強みを活かして、企業間の連携をコーディネートし、新しいマーケットを創造するところに銀行にしかできない特別な存在意義があるのではないか」と、藤原さんは考えました。

こうした視点から、「りそなカード」「FM 802 アートプロジェクト」「天神橋筋商店街まちおこし」など多彩なリーナルプロジェクトを映像などを駆使して具体的に説明していただきました。クリエイターやメディアなどとの連携にも取り組まれ、多くの人々をプロジェクトに参画させることに成功していることが生き生きと語られました。

3人の講演では、研究者、映画監督、銀行マンという立場の違いはあれ、ひとを語り、文化とアートを語り、地域の経済を活性化していくという点では、大きな共通点があることを示唆しています。今日の日本社会が直面している課題を解決する道筋が少し見えてきたと実感しました。（実行委員　杉原五郎）

第1分科会「21世紀のまちの中心とは」

第1分科会では、映画監督の中江裕司さんをコメンテーターに、街なかの寺院を地域の文化、社会活動の拠点に再生された應典院住職の秋田光彦さん、神戸・新開地で実践タウンマネージャーとして様々なイベントや事業を展開されている古田篤司さんをパネラーに御招きして、文化や教育、アート、映画、宗教などの活動を通して、「21世紀のまちの中心とは」をテーマに話し合いました。

新しいまちの活動の場とは？

20世紀末にまちの中心と言われた商店街や駅前などが衰退しています。しかし、「遊休地」と呼ばれた寺院や「怖い」と呼ばれた繁華街などに、これまでとは違ったコトが起こり、これまでとは違った人々が集まり、新しい出会いや交流が生まれています。特に、「縁起をつなぐ共同社会」「コモンズの創造」「まちのファンづくり」等のキーワードが提示され、空間や拠点ではなく、人と人との関係性や人々の行動そのもの、スピリチュアルの中にこそ、新しいまちの中心のあり方があるのではないかという問いかけが印象的でした。

映画やアート、宗教を通し、生と死や時代を問う姿勢

また、まちづくりで映画やアートを語る場合に、どうしても軽い印象を感じてしまうことが多い中で、映画やアート、宗教などを通して「生と死」に真剣に向き合い、人間の弱さや感情の動きの中で、次の時代を築いていくための問いを持ち続ける姿勢が大切であることを3人のクロストークから学びました。

（副実行委員長　大阪事務所　中塚一）

第２分科会「市民まちづくり連携・継続を探る」

第２分科会は市民主導のまちづくり活動の長年の継続的な取組の成果として、地域再生の順調な風を吹かし続けている東京と京都の事例から、その原動力とノウハウを学ぶことを目的に企画しました。

東京の神楽坂地区で活躍する「NPO 法人　粋なまちづくり倶楽部」の寺田弘理事長からまちづくり活動との出会いから神楽坂のまちでの活動への参加の経緯、そして神楽坂のまちづくりのポイントを紹介して頂きました。その中でも「外からくる人に喜ばれるまち」となるために、「何事も住民と外来者が組んでやりとげること－人がタテ糸とヨコ糸で上手に織り込まれること」との言葉に、まちづくりの現場での協働の意味を痛感しました。

京都の「歩いて暮らせるまちづくり推進会議」の河野泰事務局長からは平成 12 年から住民・事業者・市民組織・行政が手をとりあって取組を継続している「歩いて暮らせるまち」の活動紹介をして頂きました。多様な団体のネットワークのもと、自分たちがしたいことを自分たちで活躍の場を見つける緩やかな運営形態で継続している思いと、コンサルタントとしてまちへの恩返しの意味を持つ活動のモチベーションのご披露を頂きました。まちづくり活動の現場に飛び込む私たちの仲間の意識を本当に的確に表現して頂きました。

お二人の報告の後、第１部の「りそな銀行の藤原明さん」も交えて意見交換を行いました。

市民まちづくり活動に対する関わり方、支援のタイミング、継続力、そして熱き思い入れなどを参加者のみなさんと共有することができました。

（実行委員長　京都事務所　石本幸良）

第３分科会「地域のなりわいとたたずまいを考える」

第３分科会では、佐々木雅幸さんをコメンテーターに、石見銀山で暮らしをデザインし続ける松場大吉・登美さんをパネラーに御招きして、石見銀山での暮らし、企業活動、まちづくりの実践と創造都市論のコラボレーションを通して、「地域のなりわいとたたずまいを考える」をテーマに話し合いました。

非効率の中に宝物がいっぱい

何となく懐かしく、それでいて生き生きとした新鮮さを発信し続ける石見銀山の魅力は、非効率の中にある宝物探しにあるようです。「都会が捨ててきたモノを丁寧に拾い集め、今の暮らしに活かしています」とは登美さんのお言葉。「数字や効率性ばかりを追い求めると人のモラルは低下し、様々な場面で害を引き起こします」とは大吉さんのお言葉。都会者には耳の痛いお話です。

創造的な日本（クリエイティブ・ジャパン）の胎動

創造都市論の補完として創造農村論の必要性を説かれ、「都市と農村がそろってはじめて創造的な日本が始まる」とは佐々木先生のお言葉。本物を本気で楽しみながらつくるこだわりの創造が、効率性を超えたまちの創造力になりうるのではないでしょうか。

共利共生のまちづくり

３人のクロストークから、なりわいとたたずまいの良好な関係には、「遊び心と夢を分け合う仲間」と「丁寧な暮らしの実践」が必要だと感じました。共に遊び、共に楽しみ、共に暮らす。そこには、人間があり、手間があり、本間があります。

（実行委員　大阪事務所　森岡武）

第３部テーマ別まちづくり交流会

40周年記念事業のテーマである「タグボート」をキーワードに、近年取り組んできた数ある業務の中から39テーマを選び、アルパックとしてこれらの業務の中で何を牽引してきたのかを表すＡ１サイズのパネルを作成しました。

これらのパネルは、すべてアルパック所員の手作りにより作成したもので、当日の会場では壁一面に貼り出して、フォーラムに来られた方に見て頂きました。また、業務に関係する地域・施設からはパンフレットなどをご提供いただき、パネル前の机に並べて、参加者にお配りしました。

この交流会が他の地域のまちづくりを知るきっかけになり、参加者の交流に結びつくお役に立てたなら幸いです。

＜タグボートの一例＞

・町式目・憲章づくりによる市民合意の基礎づくり
・土地利用計画と両輪となる「地域づくり活動」の掘り起こし
・環境学習プログラム実施支援と学習ツール開発

（実行委員　大阪事務所　高田剛司）

番外部／交流懇親会

テーマ別まちづくり交流会のポスターセッションの盛上がりでフォーラムは終了しましたが、新しい出会いや旧交を温める余韻の酒席を持ちました。便利を第一に、セミナー会場地下１階の「愛のマイ箸１億人運動」を展開している(株)マルシェグループの‘酔虎伝’を借り切り、立席でないブースに分かれた和風の風変わりな会場となりました。

会費制ではあったのですが、講演者、コメンテーター、発表者と、アルパックとは馴染みの皆様はじめ、仕事でご一緒している方々がご参加下さいました。既に宴の始まっているブースもある中、無礼講ではありましたが、酔虎伝名物の陣太鼓を合図に、森脇大阪事務所長が開会のあいさつ、三輪相談役の乾杯でスタート。その後、フォーラム会場の後片付けを終えた所員が合流し、熱気の中、車椅子あり、立ち話あり、ブースを越えた交流で、ノミニケーションが盛り上がりました。宴たけなわではありましたが、松本京都事務所長の中締めで、三々五々、大阪天六のまちに繰り出した次第です。

（実行委員　大阪事務所　馬場正哲）

心地よく歩ける京都・四条を目指して

京都事務所／高野　隆嗣

京都のメインストリートの挑戦～その後

秋の深まりとともに、京都には昨年もたくさんのみなさんが観光にお越し下さいました。師走も年の瀬が押し迫る中、市民をはじめたくさんの来街者で、京都都心はたいへん賑わいました。

京都の中でも一番の目抜き通り、四条通の地元商店街「四条繁栄会」のまちづくりは、昨年も奮闘が続きました。近年の取組を振り返りながら、今後の「風格と華やぎのメインストリート」づくりの展望をご案内したいと存じます。

四条繁栄会は、四条通の烏丸から鴨川まで、およそ1kmに渡る京都最大規模の商店街です。組合員の中には大丸・高島屋・阪急・藤井大丸の4百貨店をはじめ、呉服・茶道具・京小物などの老舗やブランドショップ、飲食・小売の名店などが軒を連ねています。

商店街の事業も極めて多岐に渡り、販売促進や環境整備、広報誌「四条」の発行のほか、季節を彩るアーケード装飾などが判り易いところでしょう。当ニュースレターで度々紹介しているKICS（LLCきょうと情報カードシステム）も、四条繁栄会がメインプレイヤーとして産み育ててこられた事業です。これら全ての取組が広義には「まちづくり」ではありますが、紙面の都合もあり「景観・交通・沿道土地利用」に係る取組に限定してご案内します。

四条繁栄会におけるまちづくりの系譜

四条繁栄会におけるまちづくりの黎明期は、高度経済成長前夜の昭和32年、沿道店舗のあり方を示した「四条繁栄会商店街環境整備規定」です。四条通は商店街であるとともにビジネス街としての色合いが強く、今もたくさんの銀行・証券会社が軒を連ねています。一階部分の間口だけで見れば、総延長の1／4は金融機関です(四条繁栄会調べ)。当該「環境整備規定」では、一階部分の小売・飲食等の店舗利用の促進と、金融機関の窓口業務終了後の設えについて、戦争の記憶がまだ生々しい時期に規定しています。

四条通のまちづくりで、第二のエポックとなったのは平成13年「基本理念」制定です。バブル狂乱の中、四条通沿道でも地上げや老舗の廃業が起こり、「失われた10年」には金融機関の統廃合や、小学校統合に伴う近隣への風俗店の出店などが看過できない事態となりました。「四条通のあるべき姿を明確にしないと、まちがダメになる」と危機感が高まり、「基本理念」が定められました。

四条繁栄会におけるまちづくりの系譜

（1）「環境整備規定」制定とバブル狂乱

昭和32年　「環境整備規定」制定
昭和44年　〃　第一次改訂
昭和45年　歩行者天国「四条ひろば」開催
昭和53年　「環境整備規定」第二次改訂
平成元年　〃　第三次改訂
バブル経済と崩壊（地上げ・相続問題等の発生、ぱちんこ店の出店対策）

（2）「失われた10年」から新たなまちづくりへ

バブル後の長引く不況の中で四条通りも変化
・空きテナント問題　／金融機関の統廃合
・老舗の転廃業　／ドラッグストア等の出店
・小学校統合に伴う近隣への風俗店の激増
平成13年「基本理念」策定
平成14年　第一次「地区計画」策定要望
・「風格と華やぎのメインストリート」を目標
・建物1階部分への物販・飲食の立地誘導
・風俗店、共同住宅等の立地規制
平成15年　「全国都市再生モデル調査」実施
平成16年　第二次「地区計画」策定要望
・ぱちんこ店の立地規制
平成16年　「タクシーチケット事業」の実施
・タクシーとの共存共栄を目指して
平成17年　「交通環境改善に向けた要望書」を京都市長に提出
平成18年　金融機関とのまちづくり懇談会
平成19年　京都市「交通社会実験」実施に際した取組（YES/NOボード＆新聞意見広告）

四季折々の装いも組合事業（左：Xmas 装飾、右：正月装飾）

平成14年以降、今日まで取り組まれている、地区計画、都市再生モデル調査、タクシーチケット事業など一連の事業は、この「基本理念」に基づく事業です(既に当ニュースレターで紹介しております。Vol.120、125、128、132)。

四条通りにおける重点課題

四条通における今日的なまちづくりの重点課題は、3点に集約されます。第一が、老舗や魅力的な店舗の立地を誘導し、小売・飲食中心の華やぎある商店街をつくること。京都では近年、四条烏丸界隈でお洒落な店舗の出店が続いていますが、四条繁栄会の戦略と合致しています。

重点課題の第二は、風格ある街並みや店舗景観を形成すること。昨年は京都市の景観条例が改正され、四条通では原則として袖看板が設置できなくなりましたが、この機会に新たな仕掛けを模索しています。このお話は改めてまた別の機会に。

重点課題の第三は交通問題です。四条通の道路幅員は22 m、このうち片側3.5 mの歩道が2本ありますが、一日1千台にのぼる路上駐輪があり、土日ともなれば数万人を超える歩行者交通量から、とてもウインドウショッピングどころではありません。4車線ある車道も、路上駐車とタクシーが数珠繋ぎとなるため、歩道側の車線が双方とも機能していませんから大変な渋滞です。

「お越し戴いたみなさんに、ゆったりと心豊かなひと時をお過ごしいただきたい」との願いから、四条通の歩道拡幅と公共交通優先の新たなルール作りについて、四条繁栄会は「『心地よく歩ける四条通』の実現に向けた要望書」を平成17年12月に京都市長に宛て提出しました。

京都市交通社会実験の実施 (10/12 ～ 14)

この要望書を踏まえて、関係機関等による検討・準備が行われ、京都市の交通社会実験が昨秋10月12日から14日までの3日間実施されました。四条通における実験内容のポイントは以下の通りです。

- 四条通（烏丸～鴨川）の歩道を双方2倍程度に拡幅（車道4車線を2車線に削減）
- 四条通(烏丸～河原町)の車両通行をバス・タクシーに限定（時間限定／マイカー・業務車両の排除）
- タクシーベイの廃止＆バスベイの再編成
- 南北細街路の車両通行止め

実験当日の様子は、既に新聞等で再三報道されているのでご存知の方も多いでしょう。広々した歩道はストレスなく往来でき、道行く人の評価も上々。数日前から集中的に路上駐輪の撤去も行われていたため、一層すっきりした印象です。

半減された車道もすっきり。タクシーベイの廃止で乗降に伴う渋滞も危惧されましたが、もともと歩

通常の四条通（左）と社会実験当日の様子（右）　※写真提供：四条繁栄会

拡幅された歩道で寛ぐ歩行者（07/10/13）

四条繁栄会主催「Yes/No ボード」の様子（07/10/13）

道側の車線は、路上駐車で「死に体」でしたから、総量が減ったことの効果が勝るようです。むしろバス停付近の歩道が狭くなるため混雑が酷く、バスベイも廃止すべきかもしれません。

課題もタップリ･･･

そもそもこの社会実験は、交通環境を改善するための施策に本格着手する前に、問題点を洗い出して充分な対策を研究する目的で実施するもの。今回の実験は準備期間も短く、地域のみなさんはじめ市民的な理解を拡げると言う点では甚だ未熟であり、誤解や混乱、混雑を引き起こした面もあります。

先述の通り、四条通は車道も歩道もすっきりしましたが、南北の細街路は全ての車両が通行止めとしたため、混乱した車が一部で数珠繋ぎの大渋滞。自転車も通行止めですから、ご近所のみなさんも閉口されたようです。取組への理解と共感を拡げる努力が必要です。

四条通の将来像を問う Yes/No ボードを実施

先述の通り、今回の社会実験はあくまで「京都市主催」であり、四条繁栄会が関係者として協力できることには限界がありました。そこで四条繁栄会では、四条通りの交通環境のあり方を見直す契機となるような「新聞意見広告」を企画しました。

準備を進める中、意見広告を折角出すならば、社会実験当日に『現状』と『将来像』の賛否を問う「Yes/No ボード」に取り組もうという話が持ち上がり、急遽準備に取り掛かりました。社会実験の2日目にあたる10月13日(土)正午より、四条河原町の三井住友銀行と四条富小路のジュンク堂書店の店頭、2箇所で総勢20名が道行く人に協力を呼びかけました。アッという間に写真のような人だかり。通行やお店の営業の妨げにならないかと、現場で私は終始ヒヤヒヤでした。

夕方7時までに配布した投票用シールは10,297枚、投票に協力戴いたのは8,165枚（回収率79%）。そのうち88%にのぼる7,153枚が「現状よりも歩道拡幅が望ましい」と投票して下さいました。

心豊かなひと時を過ごせる京都都心を！

Yes/No ボードの結果を踏まえて、10月25日の京都新聞朝刊4面に全面カラーの意見広告を掲載するとともに、「市民の皆さまが『心地よく歩ける四条通』を実現するため」の意見&提案を募集しました。

社会実験当日に寄せられた意見と同様、ゆったりと歩ける広い歩道に賛成する意見が多い中で、単なる歩道拡幅に終わらせるのでなく、総合的な交通対策、魅力的なまちづくり・店舗づくりを望む声が数多く寄せられています。また、社会実験当日の混乱と混雑に対する批判も根強いものがあります。

京都市長は「3年後の本格実施」を明言されています。どのような形で実施するにしても、市民・事業者・来街者と行政当局との対話をもとに、みんなの知恵を集めて、今回の教訓をもとに対策を講ずることが不可欠です。

四条通における挑戦はまだまだ続きます。四条界隈の環境が良くなるだけでは、市民や来街者のみなさんの気持ちを掴むことは出来ません。「心地よく歩ける四条通」とあわせて、河原町・寺町・錦・三条･･･烏丸まで、「心豊かなひと時を過ごせる京都都心」の実現に向けて、微力ながら私たちもお役に立てる一年になれば幸甚です。

四条繁栄会の意見広告（京都新聞 07/10/25 朝刊）

地域ぐるみの子育て、そのホントノトコロへのアプローチ

京都事務所／廣部　出

保育所施設の総合的な維持管理・更新に係る計画策定など、お手伝いする機会がありましたので、きんきょうとしてご提案など少々。

■イマドキの子育て世帯

一般に子育て期は、周産期・乳幼児期の保健・医療や公園デビューなどを通じた地域との関わりのなかで、ある世帯が地域生活者としての自己像を再構築する時期であると言えそうです。同時に、女性の働き方に制約が加わりやすい現実があり、「男は仕事、女は家庭と仕事」という新・性別役割分業が強化されがちなライフステージでもあります。では、ここしばらくの子育て期の世帯を取り巻く状況はどうでしょう。

■保育の社会化から就学前教育・保育の一元化へ

高度成長を通じた人口の都市集中と核家族化の進展などに伴い、子育ての多くをひとり母親が担う社会が形作られてきました。しかし子育ては、母親が単独で担うことはもちろん、家族だけで担うことすら、難しいのが当たり前です。そして、事実として女性の社会進出が拡大したこと、少子化対策が喫緊の国家的課題と認識されたことなどを背景に、地域社会が子育て支援として用意する保育は「保育に欠ける子への措置」から「誰もがニーズに応じたサービスを選択し利用する」ものとなりました。

即ち、現在、子どもの「育ち」を保障し、彼らを養育する世帯がゆとりをもって子育てを楽しめるよう、いっそうの保育の社会化が図られているところです。そして、ここに至って就学前児童への教育と保育を仕分ける必然性がますます希薄となり、ようやく（！）幼保の機能を併せ持つ認定保育園の整備といった状況も進んできています。

■「いやぁ、子育てって、どえらく大変そうですね」

そうなんです。「女性偏重となっている子育て負担の軽減」などと長く言い過ぎてきていますので、気がつけば「子育てのしんどさ」ばっかり宣伝しているようなもの。ここいらで「子育てとは女性にとって負担が大きいものである」なんて、たとえ事実でもいたずらに強調するのは止しにしましょう。そろそろ「男性が子育ての喜びを十分に享受できなくて可哀想だ」とか言っちゃうべきですよ、たぶん。

■閑話休題。

さて、ワーク・ライフ・インテグレーションという呪文のような言葉が徐々に普及してきていますが、ご存知でしょうか。従来、ワーク・ライフ・バランスという言葉で「仕事と生活を対置させてそのバランスを大切にしましょう」という表現がなされてきました。これに対して「そもそも仕事と生活は単に利害相対するものではない」「仕事を自らのライフスタイルのなかでどのような位置づけとするかを重視すべきである」という考え方によって「統合」を意味するインテグレーションという表現が用いられているわけです。

■コミュニティ・ワーカーを、子育て支援施設に！

ある世帯が自らを社会化させていく上でかなり重要な子育て期。ここに、地域の保育所や幼稚園は一定以上の親密な関わりを持ちます。今後さらに積極的に関わることが求められるなかで、それぞれの世帯のワーク・ライフ・インテグレーションをソーシャルワークの立場から支援する機能が付与されるとすると、なんだかとてもいいことのような気がしませんか？

ですので、どちらかで保育所の統廃合や認定保育園の整備などお考えでしたら、地域に出向いて活動できるコミュニティ・ワーカーを１名、新設施設に配置することをお勧めしたいのです。世代間で主体としての連続性が少子化によって途切れがちな親世代（ニュースレター120号参照）をつなぐなど、子育て支援の市民活動の展開にも貢献できるでしょうし、虐待防止ネットワークの核となるかもしれません。地域福祉活動の担い手が継続的に輩出される社会装置のひとつとなることなども、期待できるに違いありません。

高瀬川に展示された彫刻

立誠校が誇るグランドピアノ

京都の繁華街を芸術・文化で盛り上げる。木屋町の挑戦！！まなびや2007～芸祭～の開催

京都事務所／山﨑　裕行

今回の舞台について

京都の繁華街の一角を担う木屋町界隈。河原町通と鴨川の間にあり、交通アクセスが良好なこの界隈には、連日連夜、学生、観光客をはじめ、多くの人で賑わっています。

その木屋町界隈のメインストリート、木屋町通の三条通と四条通の中ほどに、都心部の人口減少のために、統廃合された小学校の一つである元・立誠小学校（以下、立誠校）があります。この立誠校が今回の舞台です。

まなびやとは？

さわやかな秋空の下、10月20日(土)、21日(日)に、立誠校で「まなびや2007～芸祭～」が開催されました。まなびやは2002年度から始まった取組で、今年で6回目です。

取組のキッカケは、1994年の廃校後に風営法の規制が外れたことで学校周辺に風俗店が乱立し、地域のイメージが悪化したことです。界隈の新たな魅力として文化・芸術の発信を通じて新しい来街者を迎え、地域の荒廃を止め再生しようと、立誠学区各種団体を中心とする地元住民、市民団体、学生ボランティアなどが立ち上がりました。校舎を利用するということで様々な制限がある中、多くの方のエネルギーと智恵を導入して、共同ワークで続けられています。

今回は、高瀬川での彫刻展をはじめ、校舎内の各教室では京都を拠点に活躍されているアーティストの作品やエコロジーをキーワードにデザインされた風呂敷、空き缶アートなどの展示、廃油を利用したエコ・キャンドルづくりのワークショップなどが行われました。他にも、土曜日には中庭や旧職員室を利用したカフェでのシネマ・クラシックス・コンサート、日曜日には講堂で、現在、木屋町を研究拠点としている立命館大学政策科学部の学生によるシンポジウムなどが行われました。

両日への参加で、特に興味深かったのが高瀬川の彫刻と空き缶アートです。

まず高瀬川。普段、あまり気に留めることがなく、横を通るだけでしたが、突如として現れた彫刻に自ずと視線が川全体に・・・。目を向けて初めて気づく餌を求める鷺や小鳥の姿に、まちなかの川でも、多様な生物を育んでいるのだなと感心しました。

そして空き缶アート。正直、空き缶で、何が出来るのだろうと思っていました。しかし、空き缶を巧みに折ったり、曲げたり、また様々な色、大きさのものを組み合わせることで、本当に空き缶？と思ってしまう作品ばかり。作品の仕上がりと作家の技量にただただ驚くばかりでした。

立誠校の正面

立誠校のここに注目！！

さて、今回の舞台である立誠校。京都に残る番組小学校の一つでもあり、地域の方の心の拠り所ともなっています。校舎には普段は入ることはできませんが、本年度は京都市が推進する「文化芸術による地域のまちづくりモデル事業」の拠点として、ここ立誠校が位置付けられています。「まなびや」以外にも1月、2月、3月で様々な文化・芸術に関するイベントが行われる予定で、校舎内に入ることが出来るかも！！その時に、注目してもらいたいのが講堂にあるグランドピアノ。ドイツのグロトリアン・スタインヴェッヒ社製のピアノは、校舎が現在の土佐藩邸跡に建てられた昭和2年からあるとのことなので、少なくとも80年以上、一説によると日露戦争の戦利品とも言われ、100年以上前に造られたものではないか、とされています。実は、立誠校にやってきた経緯について地元の方でもよくは知らないとのこと・・・。

おわりに

京都事務所では本年度、立誠校の跡地活用に向けた基本方針を策定する業務のお手伝いをさせていただいています。

文化・芸術を切り口に新たな魅力を発信している木屋町。今後、どのように魅力を磨いていくか目が離せません！！是非、来て、見て、感じて下さい。

大都市と連携して地域の再生を図る事業モデルの確立に向けて～事例紹介 京都美山編～

京都事務所／大久保　悠子

大都市遠郊部における地域再生のモデルの研究

アルパックニュースレター（Vol.144）でご紹介した「大都市遠郊部における地域活性化」の研究の続報をお届けします。大都市遠郊部とは大都市より2時間程度離れた地域を指し、当研究はこうした地理的・資金的・人的な制約から内発的のみの地域再生が困難な地域において、地域主導型の内発的振興事業を立上げる際のセオリーづくりの試みです。

研究会メンバーが活躍する地域を対象に近畿や九州の地域関係者へのヒアリング調査並びに事例踏査を実施しました。各地域における事業立上げ期と、展開期のプロセスを追うことが目的です（図1）。

仮説として「地域活性化の動きは個々の事業化のサイクルが創発され続けることで、事業の陳腐化を防ぎ、持続する」とみています。

取り組みの背景

京都府美山（南丹市）の事例では、国の減反政策によって、農業と集落形態の崩壊が余儀なくされた経緯が背景にあります。農家の行政に対する信頼度は著しく低下し、両者の信頼関係の回復には、4年の歳月がかかりました。

主要な事業

第一期の村おこし事業は、生活基盤を守るための田んぼの整備が最大の目的。集落の意向をいち早くまとめたところの整備事業化をモデルとして他の集落の一体感への機運も盛上げ、全ての集落での整備が達成されました。

茅葺民家

第二期の村おこしは、田んぼの整備の成功で一躍脚光を浴び、全国からの視察客が殺到したので集客＆宿泊拠点の整備を手掛けた事がきっかけでした。観光拠点施設として、町営自然文化村を開業、茅葺民家の重要伝統的建造物群保存地区指定に合わせた観光開発に取り組みました。ふるさと（株）を設立し、定住促進のために住宅斡旋や相談等を手がけたことで、最高時には年商数億円に達しました。また都市からの移住や都市への特産品持込販売により、都市農村交流やＩターンの拡大に繋がったわけです。

一方、村おこし事業と並行して、特産品開発に昭和40年代より取り組んできました。契機は地場産品のなめこの商品化に取り組んだ芦生集落の自治研究活動まで遡ります。また昭和60年代には「美山牛乳」、平成7年以降「美山名水」等、地域資源の活用を進めてきました。そしてこれら特産品を取り扱う「ふらっと美山」や道の駅の開業により、美山の経済振興基盤が確立されたのです。

ふらっと美山

事業の成果と成功要因

観光関連の旧村GDPはゼロであったのが数十億円にまで伸張しました。こうした成果は集落住民の達成感と誇りに繋がっています。田んぼの整備、集客＆宿泊拠点の整備、特産品開発事業の取り組みを通して、地域内に「経済基盤を確立」したことが最大の成功要因と言えます。各種メディアを上手く活用した相乗効果も大きいでしょう。

課題＆展望

美山の地域再生の取り組みにおける今後の課題は、市町村合併（南丹市）に伴う行政支援の希薄化と住民意欲の減退です。行政の支援やリードを得てきたとはいえ、ようやく民主導の動きへ転換してきた流れを逆行させることのないよう、住民の発意やイニシアチブを保つことが最重要課題です。

今後の展開は、都会と田舎で半分ずつ暮らすライフスタイルの更なる普及により、既存のストック活用等、美山のポテンシャルを最大限活用していくことです。次回以降のニュースレターで、他の地域事例も含め一般化した、地域の再生を図る事業モデルについて報告していきます。

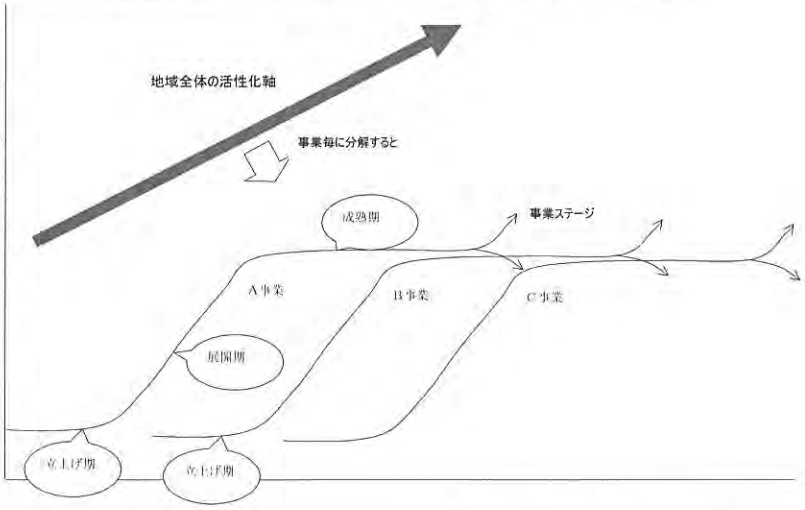


図1　事業の展開と地域全体の活性化の関係

MEDIA WATCH

「2015年 アジアの未来」

著者／日本貿易会「2015年アジア」特別研究会
発行／東洋経済新報社

紹介者／大阪事務所　森脇宏

本書は商社マンが共同執筆したもので、「成長するアジア」「世界の工場・中国」などの実態がリアルでわかりやすく示されるとともに、アジアへの貢献に関する商社マンの気概や自負に溢れています。

中国の急成長とその影響

世界の粗鋼生産量は、過去30年近く年間7億トン台で推移してきましたが、2000年に8億トンを越え、2004年には10億トンの大台を突破したように、急増を続けています。この最大の要因が、中国の鉄鋼生産国・消費国としての台頭です。中国は世界最大の鉄鋼生産国で、2005年の粗鋼生産量は3億トンを超え、全世界の25%を占めるに至っています。

石油需要も激変しています。世界の石油需要の増加ペースが加速度的に速まっています。世界の石油需要が日量1000万バレル（以下b/dと略）増加する期間は、1977年の6000万b/dから1995年の7000万b/dまで18年かかり、その8年後の2003年に8000万b/dに達しています。次の9000万b/dは、4年後の2009年と予想されています。そして、この石油需要増加の半分は、米国と中国によるものです。

ちなみに、日本の石油需要は530～540万b/dで、過去25年間ほとんど増えていません。世界の石油需要の激変を眺めると、最近のガソリン値上げの背景が理解できます。

中国における今後の発展の制約

今のところ好調な中国経済ですが、今後の制約についても触れられています。環境、エネルギー、水資源、地域間格差など、既に各方面で指摘されているとおりです。

あわせて「人」の問題が、将来の制約の一つとして指摘されており、興味深く読みました。すなわち、最近の中国では「小皇帝」という問題があるようです。これは、四二一家族（夫婦双方が一人っ子で子供が一人、双方の両親4人を加えた家族）が増えており、6人の大人に甘やかされた子供が「小皇帝」として家庭に君臨する構造で、こうした子供が未来の中国を担えるのか、という議論もあるようです。

2015年のアジアの構図

こうした幾つかの課題を抱えながら、中国は著しく成長していますが、他のＢＲＩＣｓ（ブラジル、ロシア、インド）も類似の成長が始まっています。

ＢＲＩＣｓの動向も踏まえ、本書では2015年のアジアの構図を、日本、中国、インドという中核3ヶ国に加え、アジアに利害を有す米国、ロシア、中央アジア・中東産油国、拡大ＥＵという4つの国・地域が市場と覇権を争うだろうと見ています。この中で、日本政府が仲介国の役割が果たせるかというと、実績や国際社会でのプレゼンスが低いため難しく、むしろ日本の民間企業が主体となって、ビジネスを通してこれら超大国間のバランサーの役割を果たせば、どこもアジアの覇権国家になれないだろうし、超大国同士の軋轢を緩和することも可能になると、述べられています。そして、その先鋒を日本の商社が務めたいと、商社マンの気概と自負が述べられています。

商社の役割の件は別として、将来のアジアの構図や仲介者の必要性は、かなり説得力があると思いました。歴史的にアジアとのつながりが深い関西産業が、積極的にアジアの発展と平和に貢献することができないだろうか、と最後に考えた次第です。

まちかど

今、小金井が面白い（その2）

～商店街と地域住民とのふれあい＆交流イベント～

東京事務所／黒崎　晋司

前号につづき、東京都小金井市の商店街による地域活性化の取り組みを紹介します。

昨年11月10日（土）、商店街を歩いて楽しんでもらうことを目的に商店街主催のイベントが開催されました。あいにくの雨天にもかかわらず、老若男女、親子連れなど、約1000人の参加のもと、一時的に歩道に参加者が溢れるなどの大盛況でした。

クイズラリーと子どもお祭り広場

昼間のイベントでは、商店街の各店舗内にお店にちなんだクイズを貼り出し、このクイズに回答しながら歩いてもらうクイズラリー形式の催しと、お祭り広場で用意した輪投げなどのゲームや大道芸を子どもたちを中心に楽しんでもらいました。

写真上下：イベントの様子

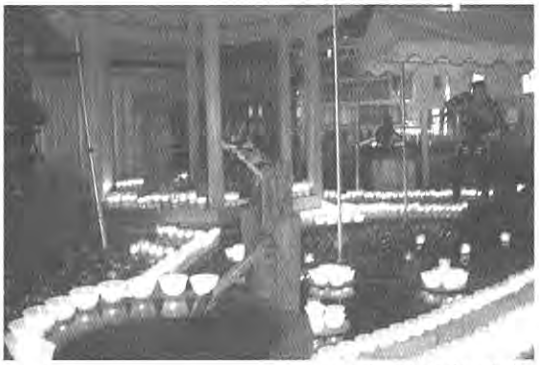
イベント開催中、各店舗の店主と参加者が談笑している姿があちこちに見られ、初めてのお店に入った参加者からは「こんなに素敵なお店が近所にあったんですね。」といった声も聞かれました。子どもお祭り広場では、イベント当日手伝いに来てくれた地元サッカークラブの小学生たちが、商店街のハッピを着て幼い子どもたちにゲームの説明をしたり、お地蔵さん姿で参加した坊主頭の幼い子どもが参加者から頭を撫でられニコニコしているといった微笑ましい光景もありました。

六地蔵敷地でキャンドルナイト

夕暮れ時からは、井戸水の出る六地蔵敷地でのキャンドルナイトを行いました。

六地蔵建立300周年にちなんだ300本のロウソクに灯が燈ると一面幻想的な空間が出現し、商店街と地域住民とのふれあい＆交流の1日は、荘厳な雰囲気に包まれつつ幕を閉じたのでした。

※商店街によるお地蔵さんの設置や、NPOによるコミュニティ・ビジネスの取り組みについては、アルパックニュースレター、次回以降につづく。



キャンドルナイトの様子

アルパック（株）地域計画建築研究所

http://www.arpak.co.jp　E-mail info@arpak.co.jp

本　社				
京都事務所	〒600-8007	京都市下京区四条通り高倉西入立売西町82	TEL(075)221-5132	FAX(075)256-1764
大阪事務所	〒540-0001	大阪市中央区城見1-4-70 住友生命OBPプラザビル15F	TEL(06)6942-5732	FAX(06)6941-7478
名古屋事務所	〒460-0003	名古屋市中区錦1-19-24 名古屋第一ビル8F	TEL(052)202-1411	FAX(052)220-3760
東京事務所	〒160-0001	東京都新宿区片町1-20 萩原ビル3F	TEL(03)3226-9133	FAX(03)3226-9560
九州事務所	（株）よかネット	〒810-0802　福岡市博多区中洲中島町3-8 福岡パールビル8F	TEL(092)283-2121	FAX(092)283-2128